

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 30 日現在

機関番号：32649

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23614022

研究課題名(和文) 観光資源としてのポピュラー音楽に関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical study on popular music as resource for tourism

研究代表者

山田 晴通 (Yamada, Harumichi)

東京経済大学・コミュニケーション学部・教授

研究者番号：40191324

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本と米国におけるポピュラー音楽系博物館等展示施設を網羅的観点から展望し、基礎的なデータの収集を行なった。山田(2012)と山田(2013)によって、両国における展示施設の状況が、データを通じた比較がある程度まで可能な形でまとめられ、日米の比較から、展示施設の規模、立地特性、展示戦略などの面における共通性と対称性が確認されたことは重要である。

また、物象化、「可視化」の形態や過程には多様なものがあり、また、複数の様態をとる取り組みが相互に関連性ももちながら展開されていく中で、地域興しやまちづくりに資する社会的モメンタムが生じることが、現地における観察と聞き取りから浮き彫りになった。

研究成果の概要(英文)：This research mainly reviewed popular music theme museums in Japan and the U.S. from a comprehensive viewpoint, and collected basic data about those institutions. Yamada (2012) and Yamada (2013) have enabled comparison between Japanese and U.S. museums upon concrete data, and have clarified similarity and symmetry among them.

In addition, it is observed that the forms and processes of materialization and visualization have variety, and different aspects may often have relevance mutually and accelerate developments, forming some sort of social momentum which may contribute to a revitalization of local community or the city.

研究分野：時限

科研費の分科・細目：観光学

キーワード：ポピュラー音楽 博物館 展示 地域文化 観光資源 物象化 可視化

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の着想は、研究分担者である東谷を中心に 2007 年ころから継続的に自主的な研究交流に取り組んできた研究グループによって 2010 年度から 2012 年度まで執行された、基盤研究 (B)「ポピュラー音楽にみるローカルアイデンティティの日米比較研究」(代表者: 東谷護、課題番号 22320044) を契機として、この研究に研究分担者として参加していた山田と、東谷との間で重ねられた議論から派生した問題意識に基づいている。山田は、この基盤研究 (B) の一環として、音楽とローカルアイデンティティ、ないし、ローカルアイデンティティをめぐる議論の中で、特に音楽文化を物象化した施設として博物館等の展示施設に注目し、山田 (2011): 米国のポピュラー音楽系博物館等展示施設にみるローカルアイデンティティの表出とその正統性、人文自然科学論集, 130, pp.155-187. を発表し、おもに米国の事例に依拠しながら、ポピュラー音楽を軸とする文化における地域性が、博物館等の展示施設という形で物象化されている状況について議論していた。

(2) 山田はまた、1980 年代以来、地域メディア論を研究上の継続的な関心対象のひとつとしており、オールド・メディアの代表格である地域紙から、ケーブルテレビ、コミュニティ放送、インターネット上の SN 地域メディアを中心に地域文化現象の社会経済的存立基盤をめぐって様々な議論を行ってきた。その過程の中で、近年の各地における地域興し、まちづくりにおける、観光事業の重要性の高まりには注目をしており、山本・山田 (2010): 観光・ツーリズム、経済地理学会編『経済地理学の成果と課題 第 VII 集』日本経済評論社 (pp.116-123) においても、こうした観点に言及していた。

(3) 本研究構想時点における上記 2 点の状況は、博物館等展示施設をひとつの切り口として、実証的研究と、政策提言との連動の可能性を示唆するものであったが、そこに新たな時限細目として「観光学」が設けられたことは、こうした研究への社会的要請の存在を確信させる、時宜を得たものであった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、ポピュラー音楽について、「ポピュラー音楽は消費者を移動させる」という側面に着目し、その観光資源としての可能性に注目し、主としてポピュラー音楽に関わる博物館等展示施設の現況の日米を中心とした国際比較と、ポピュラー音楽文化に関わる地方行政当局や観光関係事業者などの関与について、現地調査を含む実証的研究を行うものである。

(2) また、研究対象地域、調査対象事例として、日本国内各地に加え、ポピュラー音楽のグローバルスタンダードと一般に認識されている米国の事案に焦点を当て、実証研究によって得られた知見と各種データの解析に

取り組み、その成果を基に、ポピュラー音楽を軸に展開する地域的文化の存在を前提として、それを観光事業による地域振興に資する観光資源としての存立と活用を目指す政策の方向性を探る。具体的な政策提言につながる理論的モデルの提示などを射程に入れ、さらに、具体的な研究対象地域における政策提言も視野に入れ、研究成果を地域に還元することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、日本国内および米国において、何らかの博物館等展示施設が存在し、地域的音楽文化を何らかの形で「可視化」する取り組みがなされている調査対象地を抽出し、現地調査を実施して、実証的なデータを収集することに、大きな力点が置かれた。この実証的なデータがあつてこそ、理論的研究に繋がるからである。現地調査においては、施設の訪問、見学に加え、全施設を対象としたものではないが、可能な範囲で地域図書館等の関連施設における資料収集、関係者へのインタビューを行なった。

(2) 本研究による海外出張として、山田は 2011 年度に 1 回、2013 年度に 1 回、東谷は 2011 年度に 1 回、2012 年度に 1 回、2013 年度に 1 回、海外における現地調査を行い、また、現地の研究者との研究交流を行なった。具体的な訪問先は、米国カリフォルニア州、ミネソタ州、イリノイ州、オハイオ州、ニューヨーク州、マサチューセッツ州、ニューハンプシャー州などと、台湾に及び、多数の施設見学と、関連する資料収集を行なったことに加え、特に重要と思われる施設や、関連組織の関係者については、複数回にわたるインタビュー調査を行った。

日本国内における施設については、おもに山田が現地調査を担当した。本研究による出張として訪問した対象施設は、北は岩手県から、南は沖縄県までの多数に及んだ。さらに、本研究からの助成によらない、学会出張等の機会や、私費負担による調査の機会なども捉え、さらに多くの施設を訪問して考察の対象に加えた。

(3) 当初予定では、2011 年度と 2012 年度で、先進事例と考えられた米国の施設を対象とした調査を終え、2013 年度には国内の調査に注力し、特にケース・スタディ対象地を決定して具体的な政策提言を目指すことを想定していたが、山田に、申請時に想定していなかった勤務校における緊急業務が生じるなどしたため、2012 年度に予定された海外出張を含む研究課題の一部は、予算とともに 2013 年度に持ち越されて執行された。

2012 年度に、ケース・スタディ対象地として沖縄市を選び、以降は山田が集中的に現地調査を重ねた。東谷は、地域的音楽文化経験の「可視化」をめぐって、文献研究を重ねるとともに、2011 年度および 2013 年度において行なった米国でのインタビュー調査

の分析と、関連事項についての調査に取り組んでいる。

4. 研究成果

本研究の成果として挙げられる内容は多岐にわたる。その中には、本報告を作成している時点で掲載が確定している論文を含め、既に何らかの形で発表されているものもあるが、2014年度以降に論文発表がずれ込む見込みのものもある。

(1) 本研究の成果として、まず挙げるべきなのは、米国および日本におけるポピュラー音楽系博物館等展示施設を網羅的観点から展望することを可能とする、基礎的なデータの収集がなされたという点である。必ずしも文字通りの意味での網羅的なものではないとはいえ、山田(2012)と山田(2013)によって、日米におけるポピュラー音楽系のテーマを掲げる博物館等の展示施設の状況が、データを通じた比較がある程度まで可能な形でまとめられたこと、また、日米の比較から、展示施設の規模、立地特性、展示戦略などの面における共通性と対称性が確認されたことは重要である。

米国の展示施設が、概ねその規模に従って、質的にも相互に異なる3類型に分類して考察することが可能であることは、既に本研究以前に山田(2011)において指摘していたが、本研究による追加的知見の蓄積によって、この判断は妥当なものとして確認され、日米比較における枠組を提供した。

米国には、ロックの殿堂博物館、カントリー音楽の殿堂博物館、グラミー博物館など、関係業界の業界団体などを背景として持っている大規模なポピュラー音楽系博物館が存在している。また、エルヴィス・プレスリーの邸宅であり、墓所でもあるグレイスランドのような、他に類例のない位置づけになるユニークな大規模施設も存在する。これに対して日本には、米国の大規模施設に相当する規模と内容を擁する施設は存在しておらず、辛うじて古賀政男音楽博物館などが、米国の中規模施設に準じる規模で成立しているに過ぎないのが現状である。日本国内の展示施設の大部分は米国の基準に準拠すれば、小規模施設と見るべきものである。

また、米国の小規模施設のほとんどが、ポピュラー音楽に関わる著名な個人の居宅跡、ないし、スタジオ(跡)であるのに対し、日本ではそのような事例は極めて稀である。日本の小規模施設の多くは、著名な個人の記念館の類であるが、その多くは、個人の縁故地たる自治体に設けられてはいるものの、施設自体は特段の縁故がその個人とあるわけではない場所にあり、建物も顕彰される個人とは関係がほとんどなかったり、そもそも新設であったりする。展示施設の立地場所やそれを収容する建物が、都市レベルでは縁故地といえるところにあっても、都市内における具体的な場所レベルではそれにあたらないと

いう事例は、日本では小規模施設の大多数を占めているが、米国では極めて例外的存在であり、アラバマ州モンゴメリのハンク・ウィリアムズ博物館くらいしか該当するものを見出せない。

こうした展望に基づく知見の蓄積は、対象となる諸施設についてのデータ収集が、ある程度以上の網羅性を達成したことで可能になったものである。

(2) 本研究では、展示施設をひとつの核として、地域文化としてのポピュラー音楽実践が物象化される過程を把握することが企図されていたが、実際の現地調査の蓄積から明らかになったのは、物象化、ないし、「可視化」の形態や過程には多様なものがあり、また、複数の形態をとる取り組みが相互に関連性ももちながら展開されていく中で、地域興しやまちづくりに資する社会的モメンタムが生じる、という普遍性を内包した過程の存在であった。

地域内に散在するテーマに沿った様々なモノを収集、展示することで地域文化としてのポピュラー音楽を「可視化」する展示施設の機能のほかにも、地域内には多様な「可視化」の取り組みが見出された。それは、あるいは、東谷(2014)で検討されたように過去の経験の「語り」をめぐって、あるいは、地名に表象される個人名をめぐっても(山田、学会発表)立ち現れてくる。

こうした多様な物象化の様態について、山田(2014=印刷中)では、「可視化」の諸側面として捉え、

- a) 無形物の有形化、物象化
- b) 資料類の集成、展示
- c) 行事等の物象化、常設展示
- d) 常設施設における行事

といった類型化を行い、先進地事例における実践を踏まえた整理を提示している。

(3) 本研究は、最終的に具体的な政策的提言に取り組むことを研究の射程に収めている。そのためには、日本に比べてポピュラー音楽文化が盛んであることに加え、展示施設を含めた地域的音楽文化をめぐる取り組みにおいて先進的と考えられる米国の事例から学ぶべき内容について、一般化、普遍化した形で、知見を整理する必要があり、これに取り組んだ。

山田(2013)では、「米国の事例からの示唆」として、米国における具体的取り組み事例を踏まえて、日本の小規模施設が学び取るべき内容として、

- a) 真正性の演出・可視化
- b) 「語り部」としての役割を担うガイドの育成
- c) 近隣の関連施設等との連携

を挙げ、山田(2014=印刷中)では、より一般的な形で、観光資源化の過程における、

- a) アクセシビリティ
- b) アメニティとセキュリティ
- c) 観光関連情報の供給

の各側面の課題を指摘した。

こうした内容を含め、山田(2014=印刷中)では、地域文化の観光資源化に関する政策提言のための理論的枠組を提示した。

(4) 以上の成果に加え、本報告時点では成果としてまとめられていないが、今後、発表が予定される成果として、さらに数件の内容を挙げることができる。

米国における展示施設の取り組みや、地域的音楽文化の物象化については、重点的なインタビュー調査を行なった、ミネソタ州ヒビング、ニューヨーク州ビーコン、および、同州ベセルの事例について、東谷(2014=印刷中)において、モノグラフとして提示する。特にベセルに所在するベセルウッド芸術センターの取り組みについては、展示施設としてユニークな位置づけと、運営方針における確固たる姿勢に特色があり、「コレクティング・ミュージアム」という概念の提示を含め、日本の展示施設に豊かな示唆をもつ事例として有益な報告ができるものと考えている。

ケース・スタディ対象地として選択した沖縄市における地域文化の観光資源化については、現状分析と現実的な政策の選択肢の提言を行なう論文を準備中である。この事例研究については、既に、地元沖縄市の行政等の関係者や、まちづくりに関与する商店街やNPO、継続的に修学旅行の取り組みを進めている関東地方の高等学校などの関係者などへの聞き取りを実施しており、行事等への参与観察も限定的な形ながら行なって知見を得ており、それを踏まえた内容となるが、理論的枠組については山田(2014=印刷中)に準拠するものとなる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

山田 晴通、規模と立地からみた米国のポピュラー音楽系博物館等展示施設の諸類型、人文自然科学論集、査読有、No.132、2012、pp.27-54、

http://www.tku.ac.jp/kiyou/contents/hans/132/Yamada_Harumichi.pdf

山田 晴通、立地からみた日本のポピュラー音楽系博物館等展示施設の諸類型、人文自然科学論集、査読有、No.134、2013、pp.3-23、

<http://repository.tku.ac.jp/dspace/bitstream/11150/1087/1/jinbun134-03.pdf>

東谷 護、ポピュラー音楽にみる「アメリカ」-日韓の米軍クラブにおける音楽実践の比較から考える-、グローバル研究、査読有、No.1、2014、pp.43-60

山田 晴通、地域文化の観光資源化に関する政策提言のための理論的枠組、コミュニケーション科学、査読有、No.40、2014、

印刷中

〔学会発表〕(計7件)

YAMADA,Harumichi: How many roads must be named after him? The politics of naming streets after Bob Dylan in Minnesota. The 6th Korea-China-Japan joint conference on Geography: Seoul, ROK, 8 November, 2011. (ソウル国立大学校:韓国、ソウル特別市)

山田 晴通、音楽関係の小規模展示施設の立地と観光資源としての可能性、経済地理学会・北東支部例会(秋田県民会館ジョイナス)、2011年12月3日、要旨:経済地理学年報、58-1、pp.58-59

YAMADA,Harumichi: Small-scale museums on themes related to popular music in Japan. The 7th China-Japan-Korea joint conference on Geography: Changchun, PRC, 4 August, 2012. (東北師範大学:中国、長春市)

山田 晴通、沖縄市におけるポピュラー音楽文化関係観光資源の現状とその活用の可能性、東北地理学会・2013年度春季学術大会(仙台市戦災復興記念館)、2013年5月18日

YAMADA,Harumichi: Dream and reality of the Koza Music Town, Okinawa, Okinawa, Japan. The 8th Japan-Korea-China joint conference on Geography:Fukuoka, Japan, 1 August, 2012. (九州大学:福岡市)

山田 晴通、音楽博物館の存立基盤を探るポピュラー音楽系小規模展示施設の日米比較から、国際音楽資料情報協会日本支部・第56回研究例会(東京芸術劇場)、2014年6月14日

YAMADA,Harumichi: Displaying popular music: A comparative study on small-scale museums in the US and Japan. International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centres (IAML) Antwerp, Belgium, 18 July 2014. (forthcoming)
http://www.iaml.info/files/annual_conferences/2014-06-23_iaml_antwerp_programme_with_abstracts.pdf

〔図書〕(計1件)

東谷 護(分担執筆)、「米国におけるポピュラー音楽文化の継承」東谷護(編著)『ローカルアイデンティティから読み解くポピュラー音楽文化』、せりか書房、2014、印刷中

〔その他〕

ホームページ等

<http://camp.tku.ac.jp/TOOL-BOX/kaken2011-2013.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

山田 晴通 (YAMADA, Harumichi)
東京経済大学コミュニケーション学部・
教授
研究者番号：40191324

(2)研究分担者

東谷 護 (TOYA, Mamoru)
成城大学文芸学部・准教授
研究者番号：10453656